

新編水滸畫傳

三編

三

21
875
23



門へ連21
辨 875
卷 238

新編水詩画傳卷之貳拾二

東武 高井蘭山翁 譯編

明治三十九年
十月十日
辨末

○鄴哥忿ずして茶肆で用し心

好綿を調へこれと包袱とて一人の家僕に持せ再び王婆が店に別
西門官人の街に馳て細絹舗より白綾藍紬白絹を各十兩の
六王婆は包袱に詰りて西門慶の店の肉小俵にぬ。遂に後門で寢
て。間壁の家に入れば潘金蓮は王婆と逢へ樓小より友人坐已に定ま
婆は先いそ、夫人は何事か頃日我が小見ぬや。彼女が云、這ま日ハ我何と
せん身を杖う。是が教日汝の衣に看るざりし。王婆が云、夫人の
衣小替わす。我小借る裁衣日と見せぬ。彼女が云、汝何の衣服と
裁るや。王婆が云、我今年ハ是へは身替れ。動不動病起る。齡

新編水詩画傳卷之貳拾二

もと七旬に近けれ。冥途の旅出も遠るまじ。めで預けり。寿衣せ
 製んと男。それ不付て夫人。夢より今の世も又昔人のあて。別は近
 に居住る一人の奴。至前月我店にあり。あひて我今年。対ふ病れ
 せ。あひ別。寿衣せよう。と。三三色の正。既ふ十支の絲綿。と添て施し
 ぬ。我今年。の氣力も大いに衰へぬ。も。初も。子。速。縫し。めんとし
 られども。折前。裁縫等。生活の忙し。さ。と。ひて。日。と。延し。今日。ふ。ぬれども。我
 忙し。さ。と。ひて。未。我。為。に。これ。と。縫。ひ。ゆ。め。と。ま。し。く。愛。ある。と。數。日。之。
 よ。の。近。く。よ。來。て。裁。縫。も。め。んと。扱。も。日。と。為。子。に。あり。之。彼。女。嘆。て
 云。我。汝。が。為。に。縫。んと。思。へ。な。ぞ。く。ハ。小。合。ふ。ま。さ。と。い。く。せん。り。我。ら
 縫。ら。ず。も。嫌。あら。ば。は。意。に。縫。整。て。近。く。せん。王。婆。は。云。と。嘆。て。忽。ち。海。面
 に。嘆。と。合。んで。云。ら。る。あ。ま。人。我。為。に。も。と。下。し。あ。ら。ば。我。死。す。も。必。ず

其好むと。い。へ。我。久。く。夫人。針。線。の。妙。子。と。い。て。嘆。と。り。其。只。保。り。と
 願。て。敢。て。頼。ま。さ。り。り。彼。女。云。汝。何。ぞ。懇。懇。の。と。云。ぬ。あ。や。孫。我。小。縫。し。の
 方。の。美。乃。吉。日。と。擇。で。も。と。下。し。カ。バ。王。婆。云。夫。人。我。為。に。縫。ぬ。ま。さ。べ。夫
 人。の。誠。小。是。一。点。の。福。星。何。ぞ。必。し。も。日。と。選。し。と。用。ん。況。や。前。日。一。人。の。主
 願。我。店。に。來。れ。る。由。多。我。是。と。言。ら。る。に。あ。り。明。の。美。乃。吉。日。と。申。ん。カ
 されぬ。施。れ。我。未。だ。曆。本。と。見。ん。に。依。て。曆。本。と。借。て。これ。と。見。ん。と。思。ひ。し
 之。幸。ひ。福。星。の。夫。人。と。申。と。下。し。あ。ら。ば。何。ぞ。日。と。擇。し。と。せん。彼。人。が。云。我
 之。壽。衣。と。裁。へ。別。し。て。美。乃。吉。日。と。用。ら。る。れ。ば。別。明。日。と。定。め。ぬ。へ。王
 婆。云。既。に。か。く。の。下。く。バ。明。日。より。針。の。起。す。べ。し。於。く。ハ。夫。人。我。家。に。來
 て。縫。ぬ。へ。彼。女。云。汝。の。衣。に。て。縫。ん。も。我。家。に。て。縫。ぬ。も。何。ぞ。別。に。拘。束
 こそ。あ。ら。ん。や。王。婆。云。我。亦。來。來。夫。人。の。針。工。と。看。と。思。へ。希。く。ハ。必。す。我

家に來て後、彼人の云ひ、明日朝飯後より来る。王波
 大に悦び、再三感謝して、遂に私宅へ入り、叔父西門慶へ、王波が面
 面と約せ、定め別れり。翌日早天に、王波先房裡と清めて、芳茶炙餅
 新果ホとお酒へ、おろし、彼人の来るを待たせり。高時、同壁にて、衣大郎の
 食事已に終り、別彼餅と荷を、街の辺に出し、彼人の前へ、雲一
 後門より出て、王波が叔父に、来るぬ。王波、大に悦び、別延て、房裡へ入、壽衣
 の衣料及くと、衣中へ、彼人へ、渡すの、衣中を裁て、もや縫う。し、衣大郎
 再三、怒と放て、賛美し、我凡六十餘年、殆多の針線と、見れども、未だ
 かく、子母の針線と、見れば、微ふ、夫人の裁縫の、採擿、な、んとも、羨ふ。彼
 人已に、日中の比、まど、縫れば、王波、形て、酒食と、饌へ、これと、を、彼人、稱

する。能は、先生活と、過て、酒飯と、用ひ、生活と、做て、方に、衣
 大が、回る、時分、に、あり、し、衣大、別、王波と、呼んで、衣料と、收拾、せ、明日、身
 来る、む、と、遂に、又、後門、より、回ら、り、は、時、彼、衣大、も、高、貴、成、完了
 て、回り、し、衣大、門と、開て、衣大、と、逢ふ。妻が、親父、知と、見、て、同ら、る。衣
 何れの、衣と、酒と、飲ら、る。妻、答へ、別、隔、壁の、王波、今日、より、彼が、叔父、て、
 壽衣と、縫、せ、る。由、名、我、先に、彼が、叔父、に、往し、一日、中の、比、と、ひ、酒食と、用、て、
 我、小、を、ゆ、し、る。我、これと、用、て、親、父、知、し、衣大、先、を、穿、て、云、ら、る。衣、何と、
 以、て、彼が、酒食と、用、ら、る。我、ま、叔父、と、親、と、毎、度、之、必、彼に、錢、材と、使、ひ、
 し、ひ、る。と、云、れ、衣、女、明日、も、又、往、し、と、云、ふ。頼、り、め、錢と、携、て、往、酒、肉と、
 賞、潤、へ、て、宜、く、彼に、を、め、今日、の、孔と、圓、す。衣、中、も、遠、き、親、親、ハ、近、き、
 鄰、家、に、如、ず、と、云、ふ。衣、女、必、隣、家の、情、と、映、と、云、ふ。衣、女、彼、再、と、稱、退、に、



王波女謀て
西門慶が
膠漆の
媒妁を



及んで我を礼と交すんば。汝明日より彼が家に往ずして衣料と我家に
 取らせ。是を縫せし妻これと笑いふとも。只明の光宗に憑けりて。去
 夜に共に歌りて。扱彼王婆の計を没けて。彼人と我家に嫌し。妻心中に
 これと恨ぶと。眼を。翌日朝飯後。武大已に商賣に出られ。王婆自
 ら忽に武大が家にあり。彼人と話して。再び己が家に迎て。又房裡の内小
 於て。生活とささむ。漸く日中に。あんとする。此に。かの人を。目一貫文と云
 出。これ王婆に。与て云る。我今日汝の爲に一洒一肴と。調て。共に。鯛と飛
 さん。王婆是と。笑て。夫人は何の。乃理ぞや。我。憐れ。とも。顧ずして。夫人と。勞
 勞の。も。る。い。ん。ど。顛倒の。こと。と。や。わ。我。夫人の。管待と。交す。との。じ。
 必我爲に。心と。費し。や。さ。と。あ。れ。彼。人。云。汝。必。ず。是。と。粹。し。や。よ。と。あ。べ。い。ば。
 此。乃。ち。我。夫。再。三。我。小。命。と。て。汝。と。懸。ん。と。い。は。る。是。と。粹。し。や。よ。と。あ。べ。い。ば。

乃ち衣料と我家に持回りて。これと縫ふべし。王婆是と笑て云る。ハ。大郎は。ぞ
 かくの。こ。と。心。と。費し。や。さ。と。あ。れ。彼。人。云。汝。必。ず。是。と。粹。し。や。よ。と。あ。べ。い。ば。
 此。乃。ち。我。夫。再。三。我。小。命。と。て。汝。と。懸。ん。と。い。は。る。是。と。粹。し。や。よ。と。あ。べ。い。ば。
 爲り。少。し。も。て。彼。女。が。心。小。背。く。と。あ。べ。必。ず。計。の。害。と。な。る。べ。い。ば。い。ば。い。ば。
 慇懃に。款待んと。思ひ。彼。一。貫。文。の。錢。と。信。さ。る。上。に。又。己。が。錢。と。加。へ。洒。肴。
 菓子。ホ。と。笑。個。へ。丁寧と。及。し。彼。女。款。待。し。再。三。今日。の。席。の。東。道。と
 あり。と。て。謝。し。に。り。凡。世。間。に。女。十。人。の。内。八。分。は。精。細。者。あり。と。い。ふ。も。
 人。よ。計。と。儲。と。墮。坑。に。落。し。時。か。の。精。細。女。も。遂。に。去。計。に。中。つ。て。玩。小
 隕。る。と。况。や。武。大。郎。が。妻。の。こ。れ。欲。心。深。き。淫。婦。と。や。お。ま。は。り。の。酒。食。と
 以。て。彼。人。と。款。待。し。今日。も。内。と。く。何。事。も。く。回。り。り。第。三。日。に。至。て。
 王。婆。先。彼。人。と。邀。へ。て。我。家。小。來。刺。波。衣。料。と。取。出。し。生。活。と。信。し。

乃れを彼人又是と繕ふ。巳午の刻小入りぬ。時西門慶ハ列し。こ
 風流に粧ひ。おらに王婆が店の茶小出て一軒相客の味嗽とや。呼つて云らる。
 我頃日ハ世事に纏れ。久しくは色に染る。王婆ハ孫恙とや。王婆故
 と云。是と曉ぬ。解ふて店の内より着る。ハ初懇に我と云。ハ彼人どや。西門
 慶云。汝何ぞ我声と。夢識とや。ハ時王婆北ハ。ハ門茶に出。西門慶也
 見て云。乃ハ我ハ只他の客と云。と云。ハ是壽衣の施。我乃の大主
 顧。そわり。乃ハ大友人ハ是幸ハの時。来り。乃ハ我今彼壽衣と
 繕せ。小且内小入。これと着。又と。遂に西門慶と延て。房門の内小入り。
 乃ら彼人小對し。と云。乃ハは壽衣と。恵と。乃ハは施。乃ハは別ハ友人。乃
 門慶先彼人。と云。と。懇懇に礼と。は。乃ハは彼人。又忙。これと。回。ぬ。
 王婆別。乃ハ慶。小云。乃ハは我ハ壽衣。先月より。今。一向裁縫と。央。と。縫。

一めんと思ひ。れども。裁縫。ホ皆。生。活。の。忙。し。き。以。て。これ。繕。ざ。り。し。所。を。以。
 け。夫人。我。為。に。子。と。し。これ。と。繕。を。小。む。乃。ハ。の。針。線。之。大。友。人。言。一。く。
 是。と。一。覽。し。又。と。彼。壽。衣。と。云。乃。ハ。門。慶。小。見。せ。む。西。門。慶。再。口。これ。
 見て。大。に。贊。美。て。云。乃。ハ。は。夫。人。い。ん。ぞ。か。くの。ご。と。奇。妙。の。針。線。と。傳。へ。
 乃。ハ。一。そ。思。く。ハ。天。帝。の。衣。中。也。乃。ハ。神。妙。の。針。線。は。よ。も。わ。じ。彼。人。笑。
 と。脚。で。云。乃。ハ。ハ。大。友。人。虚。く。譽。を。小。し。乃。ハ。門。慶。王。婆。に。向。て。云。這。夫。人。
 ハ。彼。人。の。夫。人。なる。ぞ。や。王。婆。云。大。友。人。是。と。猜。し。又。西。門。慶。云。我。神。明。
 乃。ハ。ぬ。身。の。い。ん。ぞ。よく。猜。し。著。る。と。云。乃。ハ。王。婆。呵。く。と。お。笑。て。云。け。夫。人。
 ハ。彼。是。我。隔。壁。の。武。大。郎。の。妻。なり。西。門。慶。云。儲。ハ。武。大。郎。の。又。婦。子。
 我。乃。武。大。郎。と。穢。刺。之。彼。人。ハ。羞。に。街。に。出。て。高。臺。と。は。能。錢。と。撰。て。
 善。家。と。利。する。人。之。况。や。乃。ハ。は。實。究。て。好。乃。ハ。の。人。小。嫁。一。と。云。又。是。夫。人。

の福之王婆云我平常這人夫婦の内間と見ると睦まじく水魚の如
 彼女云我夫の愚癡懦弱の如巴老之大友人是と笑ひあふと云れ西門
 慶云夫人の言差へる古人の後にも柔軟は是身と云るの本。別強へこれ
 禍と惹之胎と云とわり。我大郎のいふは老實三昧の君子之王婆は
 と夢て早速と言と接て云る。大友人の室より我大郎は元來性格
 よ人中世く舉てこれと吹嘘西門慶可くと歩笑ひ遂に三人坐と列
 一。王婆又彼人小向て夫人は友人と識むひぬや。彼人云我いま
 織は王婆が云は友人は是尚縣の富貴人うう。知縣相公も考ふ来
 注しゆ。乃ら大名と西門大友人と市て幾万貫の錢材と保てり。
 今已に縣前に居住し。生茶舗と寢る。夫人も幸ひ織荊となり
 更とて再口詞と云し。西門慶は私不彼人が十分の情思と云て心

大に擾れり。王婆又西門慶小對して云今日大友人の有りぬ。せん
 我も又大友人の宅宅小むて邀へ来ることもあまじき。あはれいなる因縁
 こそ今日不意にこれありぬ。我何れ僥倖もや。忠は友人の施主と
 ぬ。一人の錢材と出しぬ。一人の又力と出しぬ。就中は夫人の手に經ぬ。
 壽衣と着して冥土小趣へ必きき功德に仍る。極楽浄土の徳仏法菩
 薩尽く新向す。途中小我と迎へ有る。我今夫人と款待して。縁
 けむ。恩と御謝し。後思も。只恨。く。力此小及なげり。大友人は
 老婆小整て。東乃と有り。寫しく。夫人と款待。お。上の恩。蓋と
 没る後。も。貽。ん。只。あ。は。大友人肯て。東。と。有り。あ。べ。さ。西門慶
 け。と。夢。王婆。が。思。ふ。不。む。理。有り。我。今。汝。に。整。り。東。乃。と。有。ん。と。何。も
 易。我。乃。に。酒。食。と。求。り。て。有。る。と。も。別。ち。銀。と。乞。出。し。と。有。へ。り。彼。人

是を見て必ず生受の事とありあふかといはるるに云はれどもその身に又には
 初は時王婆銀を奪て我を立しむ。彼人又身を勤る王婆別彼
 人小向て云夫人暫くは友人に陪して坐し我少停回す彼人
 これ小答て免しぬと許して又骨を身と勤る事なり。西門慶眼と歌す
 して一向彼人を見れば彼人も亦暗に西門慶が人物の風流を見て
 已に方寸を乱しり。須臾して王婆の酒肴を個へ取り乃ち是を具へて
 房間の内酒卓を設けかの人小向て云る夫人且生活と收拾すひ
 て一盃と酌交彼人云汝自ら大友人小陪して酌交我豈のてこれ小
 高んや王婆云今日は是大友人我小陪て夫人を款待すよに何西
 先と辞しあふや。飛く且生活と休て共に一盃酌交ると遂に彼人
 と延て酒卓の辺に坐とささめ已に三人飲酌と惜りり。西門慶自ら盃

に漬くと酒を篩て彼人に送て云夫人我は小は酒を乾交彼人謝
 して云多く大友人の厚意と影ると遂に盃を乾て未と飲も乾るに
 彼王婆云夫人は系より酒量大ひ之と及びぬ只んと寛げ酌交る西門
 慶又王婆小對して云汝我小陪して宜しく夫人を勤んや王婆これと
 笑て又盃を執てお勤め酒已に數巡に及びし。王婆又酒を盪て来ん
 とて已に府と立ぬは時西門慶の人小向て云夫人の喜杖の哉くぞや
 彼女が云我年ハ徒に老や。二十三歳と云一ぬ西門慶が云我年漸ら
 く夫人小又某の兄なり。彼人が云大友人の貴さ庚と云て我が謝れ
 庚に比ふは是何ぞ天と云て比小比しあふに等しんや。王婆これ
 とぞお笑ていも。此精細夫人性よく汁漿の言ふものそれの。又よく
 法子百家の工に及ぶあふある。西門慶が云はのよれ佳人焉ぞよく求る

とどゆんや。或大郎は是命中に福分大い之我實に偏向んと欲は。王
波女が玄大友人の左右小伴多の佳人あといども。然るくは夫人小及
んゑ一人もあま。西門慶が玄果して汝が云どく。我は命の薄さ故や。
未だ一人も我ふふ合ふと求は。胡夕これのを患ひする。王婆詐て玄大友人
の先夫人の聰明伶俐して。而も容貌好を出群と拔んでおひぬ。西門
慶も同じく作て玄果。我先妻がてれまわ。我何ぞけの。と云を焦えん
や。今我左右小七八人の妻あり。と云も。於て家内のとせ勢は。唯よく坐と安
んじて。喫ふの。之。彼人問て玄大友人の言夫人果をひて。幾ぞ年に出ぬ。
ぞや。西門慶が云。我先妻は聰明伶俐。小超て。伶俐人。小勝れ。流事。我小
習て。家と齊へる。が。惜しく。八不孝うして。子世。已に三年。小及ひぬ。後。不も
人の妻る。と。八屋に。梁る。れ。が。と。と云。と。わり。る。果。と。我。今。妻。る。と。云。云。

内已に七顛八倒。一ぬ。是。故。小我んを。慰めん。が。る。毎。日。街。に。出。て。奔。走。は。あ
か。に。在。と。さ。い。美。子。の。愛。愁。先。と。と。か。王。婆。が。い。ち。我。つ。く。大。友。人。の
先。夫。人。の。と。と。思。ふ。に。容。貌。聰。明。最。化。小。超。お。ひ。と。と。云。も。實。に。針。線。の
と。は。夫。人。と。及。を。せ。る。ま。ま。西。門。慶。が。い。ち。針。線。の。と。の。日。と。日。と。せ。て。流
る。る。と。は。且。先。妻。が。容。貌。も。い。づ。ん。ど。は。夫。人。に。及。が。と。と。云。は。ん。王。婆。が。云。大。友。人
の。妻。小。張。惜。々。李。嬌。々。と。と。あ。人。の。美。及。わ。そ。と。と。及。べ。り。び。人。等。ハ。又
り。や。と。と。あ。の。慶。が。云。は。ら。の。室。の。外。宅。に。養。ひ。養。ひ。ら。も。久。竟。恩。を。と
續。者。に。わ。ら。び。只。これ。一。時。の。興。と。云。の。と。と。彼。李。嬌。々。ハ。玄。年。の。秋。七。月。小。友
宅。小。引。取。今。又。後。悔。限。り。う。れ。美。聰。明。の。志。を。れ。が。老。早。晚。妻。と。と。る。は
べ。れ。も。咄。惜。む。べ。き。家。と。利。の。美。を。や。と。と。王。婆。が。云。大。友。人。の。小。合。ふ
あ。の。と。と。玄。宅。に。む。て。若。や。さん。に。列。に。妨。げ。る。や。と。と。西。門。慶。が。云。我。友。親。

新編大伴重忠伝之二十三

己に没しぬ今作ら敢て我身の上の事は妹と申すもわんや汝若我の命は
 へく思ふと看中りあるも小来て我小若し王波が去我今云一の戯言大友
 人の心に命が去堂よく意にこれわんや。為門慶が去王波云とまれ我ん小
 命が去去友人の志は一人の志也。我れを我因縁落ししてこれと要らざるの
 王波是と何々とお笑て云友人の志は小又新めて酒を勤めんづれば酒已
 小それ又大友人これと續かんと。為門慶が云り果して酒をば汝只顧酒
 と調へ身は何ぞ再び問とて用ひんや。王波これと謝して又彼人小向ひ夫人の
 言く我小若して大友人小陪して坐し。我遂付酒を求て問て彼人これと
 辞し酒を定て置ん小何ぞ又酒を求めんや。於て盃を收め又とばしてハ云
 乃れとも身を交に初せざりる王波の遂に房間と出て最後の門を関し乃ち
 店の角小坐して麻績て居り。為門慶は彼人と共に房間の裡小あり

於て王波が計小よめて一對の箱を袖とて拂ひ落し。乃小已小因縁別
 来し。乃ちかの筋書きの武大郎が妻の脚の辺りに落る。為門慶意に是
 と拾ひ九作小りてき。彼人が尖くと文佳る小脚小得り乃れとも彼人これ
 と曉さぬ教もて微笑を合し。為門慶これと見て心の内に命を鳴し。
 鼓を撃。己に計のこくひひて既と撥げ。乃に彼人お笑と云大友人ハ是
 何の戯れと申すあや。為門慶これと笑て。身を拂ひ。教を和めて云。乃に我ハ
 系来夫人と慕ひ。おと。方寸に逼て。身を惱せり。於てハ夫人我一点の
 縁を断りて。廣く恩情と。岳深く。愛恰と。あ。彼人ハ云。を。答
 て云。乃ハ大友人ハ。實にかくのこ。ん。我。又何ぞ。情。を。ん。や。け。上。ハ。只。去。遠。の
 契りと。結。ふ。へ。一。と。て。遂。に。友人。恩。を。お。ま。い。日。を。乃。ハ。雲。雨。の。始。り。既
 して友人。再。が。衣。を。ひ。して。坐。と。新。と。なる。ぬ。に。かの。王。波。の。門。を。押。扉。て

進すす入い乃すなは友人とも小こ向むかひひ云い々々大おほ友とも人ひと中ちゆうにに及およびびはは精せい細さい夫ふ人ひと也なり又また何なにぞぞかかく
 ののどどくく大おほ獲とううててもも我われがが眼まなことと詔めいささののもも我われ早はや老らうゆゆてて已いまににはは事こととと言いふ
 彼かの人ひとこれこれとと言いてて大おほ小こ聲こゑささ只ただ惘ぼう然ぜんととてて呆あはれれとと斗たうふふ王わう婆ば又また彼かの人ひと小こ對たいし
 てて云い我われ汝なんぢをを信まかしてして壽じゆ衣いととをを縫ぬいいてて何なにぞぞ却かへりりててははののどどれれとと言いふふや
 若も武ぶ大だい郎らう初はつめめのの心こゝろもも我われもも必かならずず連れん累るいとと言いふふももああららずず武ぶ大だいに
 若もりりとと言いふふにに房ぼう間かんをを出いでで身みとと面めんししれれ彼かの人ひと大おほにに慌あわ忙わいとと言いふふ
 王わう婆ばのの裙すそとと扯ひ住ぢてて云い々々形かたちくく王わう婆ば我われがが罪つみとと免ありりとと言いふふはは事こととと武ぶ大だい
 にに告つぐぐ我われはは一ひと糸いとつつひひにに休やすむむとと言いふふ況いはやや大おほ友とも人ひと小こ雜ざとと歎なげかかりり云いてて我われいいんんだ
 よよくく是こゝれれとと思おもひひぬぬ死せ門もん慶けいがが云い王わう婆ば声こゑとと言いふふとと言いふふとと言いふふ豈いかんんずずやや窓まどのの外そと人
 わりわり壁かべの上うへにに耳みみののりりとと云いふふとと言いふふ王わう婆ばののれれとと言いふふとと言いふふ又また彼かの人ひと小こ對たいしし云い々々
 我われ夫その人ひととと免ありりとと言いふふとと言いふふとと言いふふ我われ一ひとのの心こゝろとと言いふふとと言いふふとと言いふふ我われままたた免ありり

中ちゆうええ彼かの人ひとがが云いふふのの心こゝろのの極ごく至してて百ひゃく千せんのの心こゝろもも准まかへへりりとと言いふふ王わう婆ばがが云い夫
 人ひと果はたしてして我われをを准まかへへりり且かつ今いま日にちとと始はじりりてて宜よろくく武ぶ大だい郎らうとと詔めいてて毎
 日まい約やくとと差さへへりりとと言いふふ西せい門もん大だい友とも人ひと小こままとと言いふふ一ひと日にち小ことと我われ家いえににあありりああらら
 ずず我われ子こ速すみ小こ武ぶ大だい郎らう小こ告つぐぐ彼かの人ひとがが云い事ことををにに世よににあありり何なにぞぞ禱いたするる
 とと言いふふ王わう婆ば又また西せい門もん慶けい小こ對たいししてて云い大おほ友とも人ひと我われ斗たうにによよりりてて十じゅう分ぶんのの好
 事こととと言いふふ必かならずず我われ小このの心こゝろににあありりぬぬ彼かの十じゅう兩りやうのの銀ぎんとと言いふふとと言いふふとと言いふふとと言いふふ
 若も武ぶ大だい郎らうとと遠とほくくとと言いふふ我われ速すみ小こはは事こととと武ぶ大だい郎らう小こ告つぐぐ西せい門もん慶けい云い
 汝なんぢ必かならずず心こゝろとと安やすんんぜぜよよ然しかららししてて約やくとと遠とほくくとと言いふふとと言いふふとと言いふふとと言いふふ以も時とき三さん人にん又また盃さかづとと新あらた
 めめてて飲のめめとと言いふふ漸おだだ武ぶ大だい郎らうがが面めんをを時ときににあありりししぬぬ彼かの人ひと乃すなはちち西せい門もん慶けい小
 向むかひひてて夫その武ぶ大だい郎らうもも少せう刻こく回かいふふをを乃すなはちち別わかれれとと禱いたするる必かならずず明ありり又また相あ見みえ
 ずずとと言いふふ遂ついにに後あとのの門かどよりより我われがが看みへへとと禱いたするる王わう婆ばのの西せい門もん慶けい小こ對たいししてて云い



11



王婆怒て
鄆哥を懲る

大友人我が智謀の廣大なるを如何西门慶が計の古の法軍師も
誇りし我急小彼十支の銀と汝小あやし必ず是と憂ふてふれとて
そ日の遂に回りなり。扱彼武太郎が妻の遠日と初とて。毎日王婆が家
来り擅に西门慶小恩をとお交。恰も漆と膠とのどくの後小も好事
門と出ば。急事子星と走ると云とわらるる。果して未だ半月もあらず
に右近隣悉くけいと知れり。唯独武太郎と頼くのそを比又南地
小一人の少年者あり。乃ち姓の喬名ハ鄆哥と号して。僅に十八歳に成ぬ
れども。扱めて飛巧の徒。家内よ一人の老父あり。這鄆哥毎日酒店
の辺に徘徊して。酒菓を賣りて。酒を賣りて。酒を賣りて。酒を賣りて。
して商賣とほし。又尋て西门慶が憐と慕わり。は日鄆哥一籃の梨と
携て。あつ慶が家に行乃是と買もと欲して。西门慶と同一くとも。

門慶ハ已に化行して。家にあつざれを。鄆哥大驚えと憂ひ。這首那肯めて。あ
つ慶ハ今已に。條賣の武太郎が妻と私情と。毎下。ち。桑坊の王婆が
家。て。多合。今日と。必定王婆が家にあつ。さ。小汝。若。西门慶小遇と。ふ
彼。取。小。乃。て。死。ん。や。彼。鄆。哥。是。と。少。て。大。小。恨。び。垂。う。に。紫。石。街。と。る。ん。で
馳。来。り。遂。に。王。婆。が。店。に。出。て。同。ら。い。ひ。知。れ。大。友。人。ハ。驚。り。あ。ぬ。や。王。婆。が。云
大。友。人。と。云。惟。だ。事。ぞ。や。鄆。哥。が。云。は。店。小。来。り。あ。小。大。友。人。ハ。云。予。を。知。り。交
王。婆。が。云。大。友。人。ハ。世。上。に。元。法。て。高。し。汝。且。ち。姓。名。を。せ。鄆。哥。が。い。ふ。我
あ。ん。小。我。自。ら。入。て。見。え。ん。と。て。店。の。内。に。走。り。入。り。知。れ。王。婆。急。に。捕。り。住。め。云
る。ハ。汝。何。ぞ。あ。り。に。我。内。に。入。る。や。凡。人。の。家。に。各。内。外。の。隔。わ。る。ぞ。し。鄆。哥。が
云。我。自。ら。房。間。の。内。小。入。て。大。友。人。小。見。へ。我。不。速。出。し。え。ん。に。我。と。許。し。て

入る王婆が云汝少年の老いんどかく大膽のことと云我が家まで門友人と
 申らん若て来られず汝得て我が家内入らざらん鄆哥が云王婆ハ何由名
 已一人の利を貪るやがしそ汁を分つて我小ふとも何の不可なること
 わらん王婆大に罵て云汝我を以て利を貪ると又そ汁を分ち与へんやと
 云ハは何の謂ぞや我怒りの来ぞ十をさうる内に子くことと云回れ鄆哥
 云汝ハ只一滴も外小漏ぬとそ思ふべれどもは度的事我悪く是を知れり
 我悪垂ちこれと云ハ武大郎が怒つてのらん王婆彼が武大郎の名と云る
 と彼て大小怒り汝何と曉しとかくのどく我れと云や若再とび一云と吐出
 る我今汝が大陽の上に痛く奉て中ん鄆哥が云汝ハ誰れにありに我
 とおんや王婆これと彼て益怒り忽ち鄆哥と揪へて教ぐにありれば鄆哥系
 来少年者うして王婆に教するに能はざるに哭叫んで云るハ汝賊は
 何ぞかくのどく我と云や我少停汝に後悔おしめんとて垂ちの街と屋
 んで弛りり

○王婆西門慶と計啜じ

鄆哥ハ傍りけ竹の形勢と武大郎小知せんとも尋ひ知るに武大郎
 と條の櫃を掲ては辺不來じと鄆哥これを見て乃初とうけて云るは頃
 日ハ武大郎に遇ざしに我意を毎日商賣小出なふよな。王婆家へ嫁んで
 倫と致さるべし武大郎大いに驚て云汝何ぞ妄りに我妻と倫盗する
 や若人若てこれと云ハ我夫婦ハ絨とるれぞと云べさぞ鄆哥が云武大郎未だ
 人皆知ぬと思ひおんや。王婆の倫とぞ致さるべしと誰れと知ざらん我れは
 らに二ツの事あり彼倫する人系来約束の上こそ王婆に倫さる由多反にお飲ん
 だ或ハ倫と或ハ倫する何ぞ必しも世間の倫と等しうらんや必ず是と恐れ

のことありれ。或大郎これとめて中にて半と猜して云らる。汝云こまど
 以て候。我妻に漢子と偷と云。我妻小放て漢子と偷しては。
 必ずありの言と云て。我と羞辱する。我ハ漢子ハ偷るまどられた。只強奸夫と偷る。汝須く眼と明
 小一或大郎これとめて多の鄆哥と揪て同る。我妻が偷む漢
 子の雅もど。速小若よ。鄆哥云我假如若くは汝彼等と傷ひぬ
 と強まらざれば。却ては。或るこ強似る。吾利のことと官ひぬ。或大郎
 これとめて大ひに氣騰ま。多の十口又の併と死して。鄆哥に与へて云らる。
 汝り。我と憐むの心わ。彼奸夫が姓名と告知せ。鄆哥云汝り
 これとめて思ひぬ。我小一席の酒と款待。汝これと告ん。或大郎
 云汝の酒と酌んとす。何より。汝宜く我小隨て来

れとて。遂に鄆哥と引て。一石の酒。宿ふあり。或途。酒看と個へて。鄆哥と款待
 され。鄆哥大小。悦で。只願。酒と酌む。或大郎云。汝少年。必す酒と。是し
 て。車と強と。する。且。急に。彼奸夫。名と告知せ。鄆哥云。或大郎。是と
 夢ん。と思ひぬ。先。汝の。手と。我。髪。の。肉。に。入。れて。我。が。腕。の。腕。と。摸。看。ぬ。
 け。待。た。れ。控。て。縁。故。あり。或大郎。は。時。も。と。鄆哥。が。髪。の。肉。に。入。て。摸。り。ぬ。如
 果。して。腕。の。上。大。ひ。に。腫。る。或大郎。と。見。て。同。ろ。は。け。腕。の。腕。と。摸。り。ぬ。縁。故
 あり。と。云。ひ。ぬ。小。ぞ。我。ひ。と。に。これ。と。見。し。鄆哥。云。我。今。は。縁。故。と
 控。り。し。耳。と。削。て。好。夢。或。我。今。日。一。盤。の。梨。と。買。ん。と。欲。し。と。死。の。處
 と。尋。り。し。不。に。西。門。慶。化。行。し。る。思。我。又。ま。ね。と。慕。ふ。て。方。く。尋。得。し。に。
 街。中。一。人。の。友。我。小。若。と。云。ら。る。西。門。慶。今。あり。或大郎。が。妻。と。私。情。と。候。
 毎日。は。晏。の。茶。坊。小。系。と。云。を。必。定。彼。不。小。生。べ。ん。汝。若。事。わ。ぶ。速。に。是。候。

かぬに及ぶなりと教ぬを思ふ小我王は、傍小尋は、此に房間の裏にへん
とらる如に、王は、大に怒り、牙と咬奉と捏て、我々、此のごとく、お膳、ぬ、我
流く、怒る、不達、半と、汝に、昔、之必、濡て、これと、疑ひ、おふ、と、あら、大所
尚、疑と、會んで、云、る、へ、實に、這等、の、と、あり、や、我、今、く、修、ど、と、と、鄭、哥、は、笑、て
いと、く、汝、わ、の、ご、と、く、思、る、由、多、彼、お、人、汝、と、欺、て、擅、小、已、ら、が、未、と、云、る、之、汝、信、ど
ご、れ、と、云、ぬ、ふ、我、云、と、覆、と、思、ひ、お、也、是、む、世、上、の、人、多、く、知、る、而、之、必、と、疑、と
笑、し、由、大、所、これ、と、咬、て、云、る、へ、汝、云、不、一、疑、お、に、あ、る、む、これ、一、の、事、
わ、り、て、而、も、汝、が、云、に、お、意、せ、り、我、妻、頃、日、王、は、汝、が、家、小、く、衣、被、と、奪、ふ、と、云、て、
毎日、往、り、ら、が、そ、海、ご、ど、に、面、紅、ふ、し、て、酒、に、酔、り、我、自、く、これ、と、疑、ふ、と、最、深、し、
既に、今、世、間、の、人、も、智、上、に、我、意、に、彼、西、門、慶、と、捏、て、事、と、云、ふ、い、う、ん、鄭、哥、
と、云、汝、半、百、の、年、と、保、ち、ひ、て、何、の、名、形、見、識、さ、さ、と、云、ぬ、ふ、ご、や、彼、王、は、婆、ハ、原、

本、這、振、の、事、に、別、ら、者、さ、れ、報、し、め、逃、去、の、計、と、役、け、て、こ、そ、あ、ら、ぬ、汝
り、の、門、慶、と、捏、へ、ん、と、して、王、は、妻、が、お、入、ら、ぬ、王、婆、必、ず、お、馬、と、奪、て、汝、が、馬
と、奪、す、べ、と、縦、ひ、西、門、慶、一、人、房、間、の、内、に、立、と、見、ぬ、ふ、ご、も、把、柄、を、た、と、い、も、れ、は、
汝、若、万、一、の、門、慶、小、對、し、て、び、と、と、云、ぬ、ご、彼、必、ず、汝、を、い、と、お、と、わ、ん、汝、や
彼、は、た、に、友、目、の、強、後、人、に、宿、絡、し、て、辨、ひ、ぬ、お、る、れ、却、て、汝、と、憊、懇
者、と、名、げ、て、友、目、小、辨、へ、告、る、と、お、ら、ぬ、と、汝、が、汝、遂、に、無、実、の、罪、に、陥、沈、獄
を、小、於、て、仇、死、し、ぬ、ら、ん、と、何、の、疑、い、う、ら、ん、必、ず、保、て、事、と、做、壞、し、ぬ、ふ
お、武、大、將、ご、云、汝、ご、云、汝、被、り、て、そ、理、を、唯、あ、ら、ぬ、い、ふ、し、て、う、び、然、と、報、ん、や、
鄭、哥、ご、云、我、今、日、王、婆、小、擲、れ、さ、れ、を、け、根、骨、髓、小、徹、り、慙、憾、を、盡、し、我
一、の、條、と、汝、に、示、し、共、に、仇、と、報、ず、べ、汝、今、日、宿、不、に、飯、り、ぬ、ふ、ご、必、ず、け
と、と、ぬ、に、出、な、し、て、唯、く、考、の、計、を、休、む、由、明、日、と、考、の、ご、と、く、商、賣、に

出交我ハ頼トれ先街口不出て汝ぞ信ぞ知る門唐王婆が家に来りまは
 我子速汝に告ぐさる。汝は只街口の辺に徘徊し消息を窺て扱へ我
 已に汝に告ゆりある。門唐が後に随て日く茶屋の内小入彼王婆と教
 くに罵るべし。汝は彼王婆必ず又大に我を赤んとすべし。其時我王婆
 と牢く拵へ放つは。汝は便置に棄てて急に王婆が家に入り入て壺ちの房
 間の内に入る。彼ホ人果して一帯にわく。其時に棄して扱へ。其
 計いん。武大郎これを咬て大いに恨む。汝が計最絶妙なり。とて數貫
 文の錢を鄆哥に与へて。明日街に出て我を待よと云られ。鄆哥錢を
 取て去る。恨む我必し汝の爲に力と併すべし。とて遂に列れて立去ぬ。
 武大郎自ら酒錢を懐ひ。再び酒店を出て宿取へそへゆり。彼妻初
 日は毎夜武大郎と責りる。頃日己が身に不義あるを。うつて武大

と呵る。とて武大郎が不意に。武大郎已に取し。其時武大郎
 武大郎の神して何のとも云ざらん。彼妻武大が面の紅とて同る。武
 夫今日酒を酌む。其面は紅なり。武大郎が今日不意朋友不
 誘れて。二碗の酒を酌ぬ。其夜に遂に不歇なり。翌日武大郎の
 候櫃と考て出られ。彼女が門と笑して。王婆が家に入り。其後門唐と
 ぞ信する。扱武大郎の街に来て。鄆哥と取る。其に鄆哥ハ老子は。其
 出て候し。武大郎是と見て。此し。鄆哥に問て云。其は。彼西唐の
 来り。其や。鄆哥答て云。其時分。尚太ど早し。先街小池で。條を賣。其
 武大郎が云。汝は。其に依て。西門慶の。其を。我ハ。少刻。其を。其
 遂に街の上小池往。凡半時。其して。再び街に小回りて。鄆哥小官。其
 其答て云。西門慶已に。今来り。ぬ我。其に。茶店の内。小入。王婆と。其

る我がけ梨籠と門の外投出さば是とお思つて早速跑来り必し
 自ら色ちるべしと云大郎が我に赤糸と物しぬ上へあしも膠る有
 べし汝女と事と差さるれば時野哥は梨籠と提て座に王婆が
 茶坊の内入大に罵るる王婆老女汝昨日我とおとと記ぬ我
 巴不得仇と報すべきぞ彼王婆系火性の権息あるれば一云と
 て益大に怒て云汝は小孫我自ら汝と鏡しるる汝今又来と我を罵
 るいん野哥孫罵つて曰汝は清天白日の人の妻と賈て不義の利を
 貪ふ老悪女汝の毒犬いんぞかく恥とあるるや王婆是と咄ちちを
 怒京公取より起り忙しく府と立て彼野哥と揪へんとせし野哥大
 小呼て云汝成何ぞ今日も又我とおんやとて急に梨籠と門外投出
 王婆が孫を抱つさる時武大郎お母の梨籠と云つと急しく飛がし

門内に跑入るる王婆大に騒ぎさる野哥と棄て武大郎と標し住人と
 せし野哥も野哥孫抱へて放とさるれば只怒と揚て武大郎入来りしぞ
 早く解れぬと叫りり彼女房間の内にて王婆が叫る怒と武大郎
 作天し先彼房局の戸を突しりれし西门慶の床の下に隠れり武大郎
 己に房間の扉を叩て戸を推開んとすれば彼女内より牢く壓へし
 武大郎これと突て往て往て再三怒と放つて汝等よくも不義の娘と云
 るおふく門を突けと叫りぬは時彼女西门慶と帯んで云るは大官人たに武
 藝に誇りぬひるる事に隙で是と用ひぬさるいんぬの慶これと咄ち
 床の下より爬出て云るは我等て及るるわすれも事の急なるに宋と奪れ
 思量これ及さるる我今平生の手段と夫人不見すとして於て門を突
 大小吼言云るは武大郎汝必ず率尔に来ると云れ我が云と用むんは立



武太郎好夫
 迫己身を
 過片

雨に後梅あり。武大郎れとて大いに怒り。此れ走り倚る。門慶
と捉へんとせし。然るに門慶おく右の足と飛せて武大郎の心寓の上と踢りし
武大郎忽ち眼と眩し。地上小倒れり。門慶これと見て。門外に
走りむ。それを鄆哥もい勢の小怕れ。遂に王婆と持て立去り。此時右近鄰
走てびこせ。知りなれ。西門慶が猛勇に恐れ。一人も出合ふ志あり。王婆
武大郎が倒れ。方と見て大に驚き。急ぎに投起して。これと見ると。顔及土の
あてに中の血と吐られ。王婆此れ。被妻と叫んで。武大郎が血の中の水と洗入
救ひ起し。友人の女遂に武大郎と捲起て私宅小海り。乃樓の上小座と
殺けて。階より降り。翌日西門慶暗に事と知て。伺ひ知て。再び王婆が家に来り
程又彼女と擅にお娯で。只顧武大郎が死せんこと。敢ひり。武大郎の已に又七日
外れ。胸の痛ます。盛ん。自ら大いにこれと告ぐ。被妻小回て湯や

水れども湯と多し。水と水れども水と多し。此れは。文飢渴の憂と如り。被妻は毎
日。痛と解りて。王婆が家に。行回。て。酒に酔。さ。と。あり。れ。を。武大郎。是。と。見て。
毎度大に怒り。氣と失ひ。一人も着病。志。さ。田。武大郎。益。大。に。嘆。じて。
被妻と叫んで。云。ろ。は。汝。奸。夫。と。求。め。ろ。と。世。間。の。人。皆。これ。と。知。る。志。多。し。被。妻。は。小
奸夫と捉へん。と。云。ふ。然。れ。汝。被。奸。夫。と。して。我。胸。と。踢。り。め。今。に。生。と。求。む。も。
生。と。死。に。死。と。求。れ。も。死。と。地。に。若。し。万。子。と。て。か。け。て。身。を。と。悩。ま。す。汝
等。友人。を。樂。と。な。して。使。多。り。れ。は。我。死。ま。す。と。あ。ら。ば。我。才。武。松。い。ん。ぞ。は。仇。で
報。せ。ざ。ら。ん。や。汝。も。知。ら。ず。武。松。は。是。虎。と。赤。殺。せ。勇。力。の。豪。傑。は。汝。り。と。云。
我。と。着。病。し。て。使。多。と。遂。一。ひ。ろ。と。め。ら。ば。武。松。今。回。亦。も。我。は。事。と。沙。汰。
す。ら。ば。若。汝。我。と。着。病。せ。ず。ん。ば。我。武。松。が。敵。と。侍。て。は。夜。の。事。一。く。詳。に。被。に
告。ぎ。ぞ。被。妻。は。言。と。ぞ。一。言。と。告。ず。し。と。程。又。王。婆。が。家。に。来。り。乃

西門慶不對。武大郎云。と具く告る。西門慶これを見て。大に驚き。さて云。我老子系腸。思て。虎と殺す。武大郎が名を叫び。彼れを清河縣。小龍。第一の豪傑。之彼を殺す。做不と。彼れに。事の成れ。不。死。た。然れ。汝と。恩。重。の日。久。う。と。互の。老。ひ。己に。骨。髓。に。洩。徹。り。し。今。又。縁。を。断。ん。と。能。ま。ず。只。娘。と。何の。計。を。以。て。以。綱。を。脱。れ。ん。や。王。婆。冷。笑。て。云。汝。女。人。の。机。を。慌。忙。す。や。毛。我。我。の。憂。を。は。る。西。門。慶。が。云。我。も。計。を。思。案。す。と。の。時。尚。人。計。は。汝。を。良。と。計。わ。ぶ。速。不。是。と。以。て。我。等。が。綱。を。脱。せ。し。め。ん。や。王。婆。云。お。人。の。長。く。丈。ぬ。と。お。ん。と。思。ふ。短。く。丈。ぬ。と。お。ん。と。お。れ。や。西。門。慶。が。云。去。く。丈。ぬ。と。お。し。短。く。丈。ぬ。と。お。ん。と。思。ひ。お。れ。毎。日。一。如。不。を。や。う。と。也。怖。れ。ず。妾。の。丈。ぬ。お。人。短。く。丈。ぬ。と。お。ん。と。思。ひ。お。れ。公。日。先。短。と。断。り。ひ。て。武。大。郎。が。病。を。平。復。の。日。と。待。て。置。く。此。と。謝。り。丈。ぬ。が。武。大。郎。同。く。あ。る。一。点。の。こ。ろ。は。し。後。日。も。

武松遠國不劣。と。わ。く。は。す。時。再。び。來。て。情。を。通。し。又。是。乃。ち。短。く。丈。ぬ。と。云。は。る。その。時。又。お。く。丈。ぬ。と。お。ん。と。思。ひ。お。れ。毎。日。一。如。不。を。や。う。と。也。怖。れ。ず。娘。も。又。我。己。に。神。妙。奇。特。の。計。あり。我。れ。も。等。閑。に。教。ん。と。ぬ。が。に。西。門。慶。が。い。ま。は。己。に。所。竟。が。計。わ。ぶ。速。に。これ。を。以。て。丈。ぬ。今。さ。う。し。め。よ。我。も。只。お。く。丈。ぬ。と。お。ん。と。思。ふ。短。く。丈。ぬ。と。お。ん。と。思。ひ。お。れ。毎。日。一。如。不。を。や。う。と。也。怖。れ。ず。と。云。は。る。第一。け。計。の。内。一。つ。の。物。を。用。ん。び。一。物。作。人。の。名。を。交。し。て。わ。く。され。た。天。香。ひ。に。大。友。人。の。名。に。あり。西。門。慶。が。云。又。い。い。我。眼。睛。を。用。ん。と。云。も。我。れ。と。刺。出。し。と。よ。べ。と。い。實。に。い。う。る。物。を。用。ん。や。王。婆。が。云。武。大。郎。病。を。治。ら。ば。坐。臥。不。自。由。を。な。ら。せ。し。も。と。下。に。は。る。大。友。人。の。名。を。交。し。て。西。門。慶。が。云。又。い。い。我。眼。睛。を。用。ん。と。云。も。又。夫。人。の。又。一。服。の。茶。を。お。め。又。我。れ。を。用。ん。と。云。は。る。武。大。郎。病。を。治。ら。ば。乃。ち。死。と。火。葬。す。一。踪。跡。も。な。く。燒。捨。す。ば。地。日。武。松。取。り。つ。る。も。何。の。把。柄。

ありては向の言をいへんや。流るも初嫁より親小従ひ再び嫁するこれに
中とこそやられぬ。あまひ大友人小娘しあふも。武松何ぞれと揺るても
夫の喪二年うしては。内暗くに我あつて。糸をいへ。喪已に満ち大
友人の家に娶り。人差別長遠の支ぬに。して老と借し。飲ひせむ。するの
之を。計にいへん。西門慶大に悦んで。いへ。王波が計に。誠小神妙奇特之
右の。流るも。生枝活と。求んと。欲せば。須らく。死の工。支と。下れ。と。云。と。われ。は。只
よろしく。王波が。計に。臨つて。急に。これと。行ふ。せ。王波が。云。計に。系と。斬て。根を
除くの。乃。理之。大友人。は。あく。恥。我と。死。て。来り。又。我。の。自。り。夫人。の。自。り。と。下。さ
し。あ。ま。み。く。せ。も。終に。武大郎。と。殺す。せ。弟。事。成。就。は。必。ず。我。と。謝し
自。西門慶。が。云。汝。と。謝せん。と。何。を。汝。が。信。候。と。候。人。や。我。自。り。能。く。れ。と
曉。せ。し。君。汝。は。只。んと。安ん。ど。計。と。行。ふ。せ。我。少。割。恥。我。と。死。て。来。り。んと。竟。し
殺す。始。末。次。の。巻。と。ん。と。月。と。し。ん

王波の計を出て松宅へ馳入りぬ。王波が計に仍て遂に潘金蓮を文と鶴
殺す始末次の巻とんと月とんと

新編水滸画傳卷之三十三

